
❖ そ の 他 ❖

龍谷大学世界仏教文化研究センター特別上映会

ドキュメンタリー映画
『ブラジル仏教：TRÊS JOIAS』

2017 年 6 月 22 日 (木) 17:00～20:00

龍谷大学 響都ホール校友会館



会場の様子
(龍谷大学 響都ホール校友会館)

❖ 概 要 ❖

テーマ：ドキュメンタリー映画『ブラジル仏教：TRÊS JOIAS』

講演者：菅尾健太郎氏（映画監督、浄土真宗本願寺派開教使）

❖ 上映会のポイント ❖

監督の菅尾健太郎氏は、2002 年よりブラジルで仏教伝道に携わってきた。本作は、21 世紀の西洋社会で進化し続ける仏教の姿を描くドキュメンタリー映画である。全三章から成っており、今回は、第一章「ブッダ」（全編）と第三章「サンガ」（約 20 分）が上映された。講演後、監督による映画の制作意図や制作過程に関する講演と会場との質疑応答がなされた。

❖ 映 画 の 概 要 ❖

第一章「ブッダ」

本章は、5 人の僧侶へのインタビューを中心に構成されている。

- ① 釈利満師（真宗大谷派南米本願寺）：まず、師がどのようにして日本文化そして仏教と出会ったのかが語られ、次に、60 年代はブラジルにおける仏教の知名度や一般のブラジルの人々と仏教の接点が今よりずっと少なかったことなどが話された。
- ② 孤圓師（曹洞禅系ブラジル禅）：新聞記者として働きスラム街を取材したときの過去が語られた。このときの体験などから、師は「この世界は何と歪んでいるのか」と強く思ったという。その後、日本で修行をし、様々なカルチャーショックを受けたことなども語られた。
- ③ ラマ・パドマ・サンテン師（チベット仏教ニンマ派系 CEBB）：師は、リオグランデドスル連邦大学で物理学を教えていた経歴を持ち、専攻の量子論の研究を通じて仏教と出会ったという。「ラマ」にどのようにして認定されていたのか、その過程などが語られた。
- ④ ラマ・ミシエル師（チベット仏教ゲルク派）：ミシエル師は、5 歳のときにラマ・ガンチェン・リンポチェ師と出会い、ラマの生まれ変わりに認定された。師は言う。「仏教をもたらすのは人のつながりです。過去にそうであったように、現在もそうあり続けているのです」。

- ⑤ 釈清浄師(ブラジリア本派本願寺主管)：師は、偶然お寺の近くに住んでいたことがきっかけで、そこに通うようになったという。そして、そこで知り合った僧侶の言葉に感銘を受けたことが語られた。その言葉は、キリスト教徒を辞め、その後民衆の解放を謳うマルクス主義にしかこの世の救いを見出すことができなかった無神論者だった師の心を強く捉えたという。

第三章「サンガ」

本章(前半 20 分)では、釈清浄師へのインタビューとともに、2015 年に首都ブラジリア連邦区の歴史文化遺産に認定されたブラジリア本派本願寺のさまざまな活動が描かれている。盂蘭盆会は「仏教寺院のバザー」として知られ、街の祝祭事の公式な暦にも登録される伝統的な祭りとなっている。日本料理の調理風景や、太鼓の響きに合わせた盆踊りに興じるブラジル人たちが、本章ではいきいきと描かれている。その他、寺院の活動内容は講演、メディテーション、武道、ヨガ、太極拳、日本語教室、折り紙教室、生花など多岐に渡る。

❖ 講演と質疑応答 ❖

講演では、菅尾監督がどのように本映画を制作してきたかが語られた。また、今回上映されなかった第二章「ダルマ」はどのような作品になるかについても解説された。

本作品はクラウド・ファンディングキャンペーンを行っており、これについても説明された。

Q. 今後どのようにブラジルにおける仏教を継承していけば良いのか。

A. 現在、ブラジルでは若い人たちが積極的に寺院に通っていることは、大変期待が持てる。しかし、一方で高齢化が進み、継承が難しくなりつつある寺院もある。この作品を通して、日本人には、先人たちがブラジルにまいた種が芽吹き始めていることを知ってほしい。

Q. 日本から渡った仏教が、ブラジルの仏教になりつつある。日本だけではなく、中国の文化も混じりつつあるように思われる。取材をして、このような文化「混淆」を感じられたことは。

A. 現在、ブラジリア本願寺では、舞踊やヨガなどの文化活動を推奨している。多くの方々がお寺で開催されるバザーを楽しみにしている。これらが、仏教に入るきっかけ、道筋にもなっている。多文化を守っていく精神をブラジリア本願寺が持っているのではないだろうか。

Q. 仏教における伝統と因習について。

A. 今までのやり方をどこまで受け継ぎどこまで変えていくことが可能か、ブラジルにあったやり方、その基準はどこにあるのか……これらは常に自身で問い続け、答えを模索していかなければならないことだと思われる。

Q. 現地の人たちが行っている読経はポルトガル語か。

A. ブラジリア本願寺では、読経は日本語、念仏和讃の和讃は、ポルトガル語に訳されたものを使用している。ポルトガル語を使用するか日本語を使用するかは、各宗派で異なっている。

Q. ブラジルにおける新宗教についてどうお考えか。また、鈴木大拙が禅を広めることができた背景には「靈性」が重要な要素としてあるのでは。

A. 日本の新宗教はブラジルで成功したと言われている。もともと日本の仏教は、移民を中心に日本語を用い、また「葬式仏教」を行ってきた。しかし、頼るべき移民のいない新宗教は、初めからポルトガル語を通じて布教を行ってきた点が大きく異なる。

浄土真宗では「靈性 spirituality」という語を使わないが、西洋では、この語を使わないと宗教的会話が成り立たないこともある。この「靈性」の「靈」は、物質だけではない、人間の精神的な部分を示す言葉である。「靈性」という言葉を鍵にして、この現代社会をどう生きるかを考えていきたい。

Q. このような作品を作る上で大切にしていること、気を付けていることは。

A. やはり、仏教徒として間違っていることを言わないこと。仏教徒としての責任をもって作品を作っている。しかし、仏教を知らない人でも分かる作品にしたい。そのような中で、言葉の使い方や表現の仕方は、常に試行錯誤している。

❖ ま と め ❖

本映画と監督の講演を通じて、ブラジル人がいかに仏教に関心を寄せているかがよく分かった。ブラジルは多民族、多宗教国家である。やはり最大の宗教はキリスト教であるが、それでも、現在若い人々がお寺に通い、盆踊りや太極拳などを通じた新しい形の仏教が根付き始めている。移民としてブラジルへやって来た先人たちの大きな努力のもとに築かれた「ブラジル仏教」は、着実に芽吹き始めている。

菅尾監督は「靈性」を強調する。ブラジルには、人種や文化を越えた「靈性」が溢れている。このエネルギーに満ちた国で、今後仏教がどのような成長をしていくのだろうか。

【文責】 龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員 唐澤太輔